

久木小学校区住民自治協議会・広報誌

住民協 ひろば

第101号（準備会から通算第122号）

発行日 令和7年9月6日

発行所 101 逗子市久木2-1-1

久木小学校区住民自治協議会

発行人 山崎 徳次郎

・・・盆 踊 り・・・

この季節に各町内で盆踊りが実施され、盛り上がったことと思います。（これを書いているのは盆の前で、これから盆踊りを迎える時期ですが）

さて、盆踊りはもともとは仏教の盂蘭盆会であったとか、歌垣の遺風とする説、原始信仰の儀式だったとする説など諸説あるようです。文献に最初に登場するのは室町時代と言われ、平安時代、空也上人によって始められた踊念仏が、民間習俗と習合して念仏踊りとなり、盂蘭盆会の行事と結びつき、精霊を迎える、死者を供養するための行事として定着していったようです。江戸時代初頭に絶頂を迎えたようですが、明治時代期には風紀を乱すとして警察による取締りの対象となったそうです。お盆の時期に行われますが、宗教的意味合いは薄く、農村や庶民の娯楽として楽しまれてきました。現在では誰でも踊りに参加できるタイプと、主に見せるために限定された踊り手が踊るタイプとがあるようで、まるでディスコのようなタイプも見られるそうです。

ハイランドの盆踊りはだれでも参加できるタイプで、今年は子供の踊りを省き、定番の東京音頭、炭坑節に加えご当地音頭の“逗子音頭”を久しぶりに取り入れ、練習会も開いて準備しました。広場の中央に櫓を立て、やぐらの周囲を回りながら音頭にあわせて踊ります。コミュニティーの世代を超えた相互の交流が図れるよう、焼きそば、かき氷、スーパーボールすくい等各種の夜店も開き、自治会役員はじめ有志の方々の協力で実施できました。

地域の皆様の交流を深めることで、災害時などの共助がスムーズに進められればご先祖様も喜ぶことと思います。

校区住民協 副代表 長嶋 啓

（逗子ハイランド自治会 会長）

令和7年8月度役員会

開催日時：2025年8月19日（火）13時00～15：

00 場所：久木会館

通常開催の住民協役員会（8月2日）は天候予報を考慮し開催を中止。8月19日（火）の連絡会を役員会と兼ねて開催した。

出席者：役員：山崎徳次郎、石井達郎、鈴木為之、

小林寿志、新倉洋一、鈴木友行、瓶子純一、

河邊寛、芹沢ふさ江、細野 裕、龍村敦子

役員外：高野毅 以上12名

配布資料

①8.19連絡会次第 ②会員名簿（修正版） ③令

和7年防災訓練概要（11月30日）について ④

住民協ひろば特別号について ⑤ちらし：学校づ

くりと地域づくりの困難と希望 ⑥7月13・20

日開催西瓜朝市報告

報告と検討

1. 事務局からの報告：7月開催の4小学校区住民協連絡会では災害時の医療体制について参加者からさまざまな意見が多数出て紛糾した。9月の同連絡会では様々な意見にたいしての回答が出されるはず。
2. 8月18日に防災安全課主催で開催された各自治会自主防への説明会について簡単な報告と説明がされた。
3. 7月30日カムチャッカ沖地震による津波警報がもたらした久小地区の自主防の動きが簡単に説明された。余談だが、この津波警報の影響によって8、18の集会では海岸側の自治会自主防から今後の課題が提言された。市でも各部署が大混乱

- をきたしたとのことから今後の災害時などに向けて検討すべき問題が具体的に浮上したもよう。
4. 避難行動要支援者避難計画についても意見交換があった。(詳細は省く)
 5. 地域公共交通のワークショップが9月7日開催される。
 6. 避難所準備員会から現在の進捗状況の発表がされた。(検討途上につき詳細は省く)
 7. 住民協ひろば特別号について編集長瓶子さんから説明とお願い。住民協の初期の写真はないか？あれば提供してほしい。
 8. 7月13・20日に開催されたスイカ朝市につき、概要と精算の報告があった。

《寄稿》

プロの技 見せてもらいました

025.7.2

駄洒落栖人

今日プロってのはこういう仕事をする人のことだって、つくづく思う場面に出会いました。

カッコいいユニホームを着た2人の男性が入ってきて、館内にあるデジタルグッズ回収箱の中身を持っていってくれます。

たくさん入っていました。

2人のうちのひとりが優しく、優しくグッズを持参のスーパーで使うカゴと同じカゴに入れました。

もうひとりの方が、今日、彼、働き出して2日目なんですよ、と笑顔で教えてくれました。2日目の彼、照れくさそうにニコッ。

そしたら、2日目の彼が取り出したグッズの上に毛布の切れ端が2枚乗っかっています。

先輩の方が、すかさず、「これはね、箱の中に入れたものがゴトンって大きな音出さないようにとグッズが傷つかないように入れてある毛布なんだよ、だから中に戻してって」、穏やかに説明しました。

ワオ、すごいことです。

いい仕事してます。

プロの仕事ってこういうことなんだなあ。

感動しました。

覗いたら、しっかりと毛布が箱の底にかけられています。

そこには、優しく包まれることになるグッズを待ち構えている毛布が敷かれています。

「携帯入っている場合もあって、レアアースなんてのが高価ですから」って先輩の方が説明してくれたりして。

出入り口までお二人を見送りました♪なんとも素敵な光景を見させていただきました。

わたし、箱の中を覗いたことなかったのです。こういう優しく丁寧な仕事をする人、

よーし、

真似するぞーって、窓の外を見上げました♪

校区住民協 監事 細野 裕



《トピックス》 ペロブスカイト型太陽電池

「農地で発電」普及へ： 日経新聞 4 月 22 日号より

鈴木 為之（山の根在住）

次世代の太陽電池といわれる、ペロブスカイト型太陽電池の実用化が始まろうとしています。

日本では、将来の再生可能エネルギーの本命を太陽光発電としているが、大規模な設備を設置できる平地面積が限られており、ビルの壁面や農地等現在主流のシリコン型の太陽電池ではできなかった場所に設置できるペロブスカイト型太陽電池に大きな期待がかけられおり、。将来の再生可能エネルギーの本命とされています。

本年 2 月に設定された第 7 次エネルギー基本計画では、2040 年には総発電量のうち 22～29%

を太陽光発電が占める見通しです。（2023 年度実績は 9.8%）

経済産業省ではペロブスカイト型太陽電池の普及を促すため、ある程度以上の規模のエネルギーを消費している事業者や設備に、2026 年度から太陽光発電の設置目標の設定を義務付けようとしています。（6 月 30 日付日経新聞）

ペロブスカイト型太陽電池はシリコン型に比べて色々な特徴があり、その長所・短所を列挙すると下表のようになります。

特徴	説明
長所	
1. 軽量で折り曲げ可能	家やビルの壁面や自動車車体等適用範囲の拡大
2. 安価に生産できる	生産工程がシンプル、印刷法で製造できる、材料が少なく安価
3. 光を透過、色付けが可能	窓ガラスへの適用や農業と両立させて農地への設置が可能
4. 弱い光で発電可能	室内での設置や活用が可能
5. 原料国産、レアメタル不要	主材料のヨウ素は国内生産、材料の安定供給可能
短所	
1. 耐用年数が短い	現状では 10 年（シリコン型は 20 年以上）とされており、改良が続けられている。
2. 有害な鉛を含む	廃棄等に制約、無鉛化の研究を継続
3. 不安定である。	シリコン型に比較して酸素、湿度、紫外線等外部環境に脆弱、改良を継続

積水化学、東芝、アイシン、カネカ、パナソニック等の企業が、それぞれ特徴ある製品を 2026～2028 年頃の上市を目指して、研究開発や実証実験を行っているのが現状です。

ペロブスカイト太陽電池の、光を透過するという特徴を生かした活用の方策として、農地に設置して農業と両立（営農型）させる活用法が注目を集め始めています。

日経新聞（4/22 朝刊）によれば、「イタリアの研究機関は、半透明の新型ペロブスカイト太陽電池の下で作物を育てると、成長が早くなることを見

つけた。光合成に使う波長の光だけが電池を透過して植物に届く。強すぎる光を適度に弱め、地面の過熱を防ぐなどして作物の葉や茎を守る効果もある。太陽電池を設置する適地が減る中で、発電と農業を同時に担うシステムの実現につながる。」とあります。

ペロブスカイト型太陽電池の光透過性を活用して発電に有効な波長の光線は発電に使い、作物の生育に必要な光線は透過させて、生育に役立てようという発想です。遮光に発電という全く新しい機能が加わった寒冷紗というイメージですね。

農業と発電を両立させる営農型太陽光発電は、現在主流のシリコン型でも行われています。植物はある量の受光量を飽和点としてそれ以上の光は有効に使われないため、この飽和点以上の光を太陽光発電に利用しようという発想で、農地の上部に飽和点までの光を通過するような設計（光が通る隙間を開ける）でパネルを設置する方法です。植物の種類によって飽和点は異なり、日陰で育つ植物等に多く適用されます。

一方ペロブスカイト太陽電池は光を透過するので、光を通す隙間を作る必要がなく、面積を有効に活用できるだけでなく、透過の程度や色を付けることによって、好ましい波長を作物に届ける可能性があります。

イタリアの研究では、ある植物をガラスの透過光

の下で育てた場合と、ペロブスカイト太陽電池の透過光の下で育てたものとの間で、後者の方が葉の総面積が25%多くなった、またある野菜は赤色の光だけを通すペロブスカイト太陽電池の元では成長が早まった、といった実験結果を得ており、発電をしながら作物の生育を促進させる効果があることが認められつつあるようです。

ペロブスカイト太陽電池は、耐久性や安定性の改善を前提にして、今盛んに実証実験が行われつつあるビルや住宅への適用とともに、営農型太陽電池にも適用範囲を広げて、大いに広がっていくものと想像されます。

営農型太陽電池は、直面する農業の振興、地方創生や更には人口減少問題に歯止めをかける一つの方策としても期待されます。

編集後記

逗子市総合的病院の誘致断念について・・・逗子市はこの程、従来から掲げていた「総合的病院」の誘致を断念するとの公式発表があった。何回か総合駅病院の候補先は話題に上ったが、結局病院の設立までには至らなかった。現在巷では病院経営の厳しさが話題になる事が多い。

医師、看護師の不足、高齢化の進行に伴う患者の入院期間の長期化に伴う受け入れコストの増加、病院食のコスト増、患者訴訟の増加、コロナ時の補助金の休止等々、病院誘致の難しさは理解できるが、「総合的病院」を断念する事のダメージも大きなものがあると考える。

この決断の対応策として、逗子に存在する人口当たりの開業医の比率が他地域より高いこと、市内開業医は主治医としての精度を市外病院の専門医との連携を密に取ることにより高めて、地域医療を展開するという。

主治医というと内科を想定するが、外科・眼科・耳鼻科・皮膚科等幅広く市内の開業医は存在し、各開業医が当該市民の主治医として認識していないケースも考えられる。市内の個人開業医の組織、仕組み、制度作りが必要となるだろう。

また、総合的病院が市内に存在しない事による、緊急時・災害時の医療体制に大きな懸念があるものとする。逗子市は急病で救急車で病院に搬送される場合には市外の病院に搬送される事となるが、病院から見れば市外となる救急車の受け入れになるので、市外からの搬送が見込まれる病院であるとの確認を綿密に行う必要があるものと思われる、

又、災害時には市内には災害障害者の拠点となる病院が無く、池子の医療センターが逗子市の地域をカバーする医療拠点となるものと思うが、病院の様に24時間医療関係者が常駐しないセンターで、地域の開業医が池子の医療センターでシフトを組んで対応する事が現実に可能なのだろうか。

医療センターには十分な医療機器が備わっているものとは思えず、災害時の逗子の医療体制は万全であるとは思えない。

逗子市に総合的病院がない事リスクは大きく、国乃至県に支援を求める事は出来ないのだろうか？

事務局長 石井 達郎